

# MONSOON COMMONALITY

Lhasa

Chengdu

Haiyan

Hanoi

Ho Chi Minh

Chau Doc

Shunri Nishizawa

Penglai

Jinan

Shanghai

Nanjing

Huzhou

Wuhan

Yucun

Lishui

Shui Yanfei

Hsinchu

Taipei

Huang Sheng-yuan

Yilan

Kentaro Suga

Shizuoka

Shiga

Tokyo

Chie Konno

Shunri Nishizawa

あらゆる人間が寛容に受け入れられる環境を思考する

近代の論理から解き放たれ

都市から周縁へ

機械のコントロールから自然の知性へ

西洋のロジックから自らが生きる東洋のロジックへ

わたしたちは今、静かな転換のただなかにあり、暮らしを再定義する契機を迎えている

このとき、地域に身を置き、目を凝らし、耳を澄ませるといった経験が糸口となる

風土に根ざす術を見つめ直すとき、人は、社会や自然の一部でもあると認識できるだろう

わたしたちはモンスーン・アジアに生きている

季節風の強い影響を受け、夏は高温多湿な雨季、冬は乾燥した乾季となる

天変地異を受け入れながら、稲作を基盤に相互扶助を築き、暮らしが営まれてきた

こうした風土のなか培われてきた営為を、モンスーン・アジアのコモナリティと呼ぼう

これは人々が各地で生き抜くために共同して築かれてきた関係性であり

地域のなかで反復、定着されてきた環境づくりの術である

地続きでなくとも、風土を通してわたしたちはどこかで繋がっている

ともに生きる場の構築

風土に根差したコモナリティを隣人とともに考え

その体験をヴェネチア・ビエンナーレ日本館で提示したい

こうした場の構築はモンスーン・アジアにとどまらず

共通性を見出しながらともに明日を生きる建築の可能性を示すだろう

Imagining environments where all people are welcomed with openness and generosity.

We are amid a quiet transformation — liberated from the logic of modernity, shifting from the urban to the peripheral, from mechanical control to the intelligence of nature, from Western logic to the Eastern logic within which we live ourselves. This transformation offers an opportunity to redefine the way we live, and it begins with the experience of inhabiting a place, looking closely and listening

carefully. When we re-turn our gaze toward the wisdom of living rooted in climate and landscape, we may come to recognize that we are at once part of society and part of nature.

We live in Monsoon Asia.

This region is shaped by seasonal winds, the summer is a hot and humid rainy season, whilst winter is a dry season. While coming to terms with natural disasters, people have built a community based on mutual support and rice farming and have made a living in this way.

I would like to call the practices cultivated in this climate and landscape the commonality of Monsoon Asia. These are relationships forged through collective efforts to endure and inhabit a particular environment, and they represent the accumulated art of shaping environments that have been repeated and embedded within communities over time. Even without being geographically contiguous, we are connected somewhere through the shared experience of climate and landscape.

Creating a place where we can live together.

I wish to reflect on the commonalities rooted in climate and landscape together with our neighbors, and to present that experience at the Japan Pavilion of the La Biennale di Venezia. The Creation of such a place extends beyond Monsoon Asia — it points to the possibility of architecture through which we can find common ground and live together, looking toward the future.

## 気候特性とモンスーンコモナリティの6つの鍵 Climate features and the 6 keys to MONSOON COMMONALITIES

モンスーン・アジアと考えられる東アジア、東南アジア、南アジアの地域では、季節風の強い影響を受け、夏は高温多湿な雨季、冬は乾燥した乾季となる。降水量が多いながらも、急峻な地形が多いため1人あたりの水資源量は西欧諸国に比べて少ない。しかし、そうした限られた水を貯留し、効率的に使用し、循環させるといった知性を、隣人と構築して暮らしを形づくってきた。

この先、わたしたちの生きる環境は、いかに立ち上がるのか。それは、近代の統治や形式的な制度による構築ではなく、人々が水平に繋がりを、集団として主体的に協働し、土地の声を耳を傾けた環境調整となるだろう。モンスーン・アジアの風土においては、地形への領域づくり、水の扱い、食文化、リズム、生命を循環の一部と捉える死生観に至るまで、様々な暮らしの特性を共有している。これらは、風土を生き抜くために共同して築かれてきた人々の関係性であり、地域のなかで反復され、定着されてきた環境づくりの術でもある。こうしたアジアの諸地域のなかで培われてきた営為を、モンスーン・アジアのコモナリティと呼び、以下の6つの鍵を起点に、さらなる思考を深めていきたい。



Yuanyang titian / Jialiang Gao



Yanfei architects / Xinfan market



Barnard Rudofsky / now I lay me down to eat



Yanfei architects / Haiyan Ketang

### 4. 風土を感じて囲む食 Savour the local flavours

モンスーンアジアにおける食は稲作を基盤に発展し、雨季と乾季の循環に応じて食材や収穫が変化するなかで、発酵や保存の技術も育まれてきた。こうした食は単なる栄養摂取にとどまらず、人々が共に囲み、関係を深める場の形成につながっている。食卓は自然の恵みを分かち合い、季節や地域の記憶を共有する媒介である。



Yanfei architects / Haiyan Ketang

### 1. 季節の詩学とリズム Seasonal poetics and rhythms

モンスーンアジアでは季節風によって雨季と乾季が明確に分かれ、気候の変化が生活や生産の基盤となっている。高温多湿な環境と周期的な降雨は、農業や水利用の方法だけでなく、人々の時間感覚や空間の使い方に影響を与えてきた。季節ごとの反復的な営みのなかで、自然の変化にตอบสนองする暮らしのリズムが形づくられ、それは環境と調和する実践であると同時に、地域固有の文化的基盤ともなっている。



Fieldoffice / Gently return to earth's surface



Yanfei architects / softmatter



Barnard Rudofsky / now I lay me down to eat



Fieldoffice / Jin-Mei Parasitic Pedestrian



Shunri Nishizawa / House in Chau Doc

### 5. 循環の一部をなす素材 Materials forming a circular loop

モンスーンアジアの伝統的な建築や環境づくりでは、素材は自然循環の一部として位置づけられてきた。竹や木、土といった地域で調達可能な資源は、更新や再利用を前提に扱われ、建築も環境の変化に応じて変化するプロセスとして捉えられていた。化石燃料による使い捨ての環境から脱却し、風土とともにある環境づくりへの糸口となるだろう。

### 2. 自然災害へのしなやかな集団的回復力 Collective resilience to natural disasters

この気候帯では、圧倒的な降雨をはじめとし、自然の災害と向き合ってきた地域が多く存在する。とりわけ急激な都市化を免れた地域では、これらを文明によって完全制御するのではなく、暮らしに取り込み、自然とともに生きる住まいの知性として育んできた。こうした実践は個々の対策にとどまらず、地域全体で環境にตอบสนองする仕組みとして蓄積され、自然災害に対する集団的な回復力を形成している。



Fieldoffice / Vascular Bundle



Shunri Nishizawa / Chau Doc



Shunri Nishizawa / Chau Doc



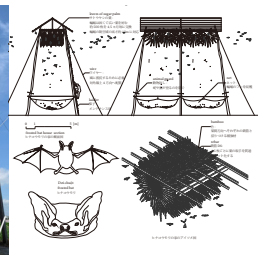
Shunri Nishizawa / Restaurant of shade



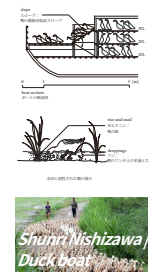
Shunri Nishizawa / House in Chau Doc



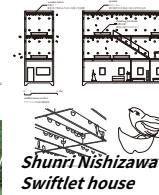
Shunri Nishizawa / Bat house



Shunri Nishizawa / Bat house



Shunri Nishizawa / Duck boat



Shunri Nishizawa / Swiftlet house

### 3. 社会的紐帯を生む農 Agriculture fostering social bonds

この地域では高温多湿な気候を活かした稲作が盛んであり、その恵みの基盤に生きている。同時に、地形を利用した棚田のように上流から下流へ流れる水は共有され、隣人同士を結びつける資源となり、水路の維持管理や分配の調整、田植えや収穫といった相互扶助の関係のなかで農業が行われてきた。こうした農の営みにおける共同性は、生産の枠を超えた人の紐帯を生み、核家族化に潜む息苦しさに風穴を開ける。



Fieldoffice



Shunri Nishizawa / Shiga



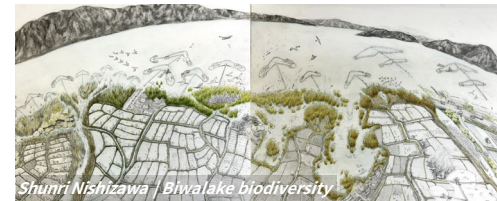
Fieldoffice / Vascular Bundle



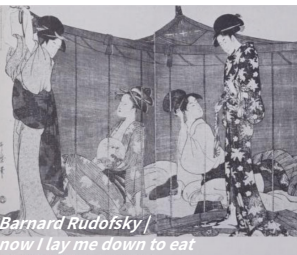
Shunri Nishizawa / Shade



Shunri Nishizawa / Shiga



Shunri Nishizawa / Biwatake biodiversity



Barnard Rudofsky / now I lay me down to eat

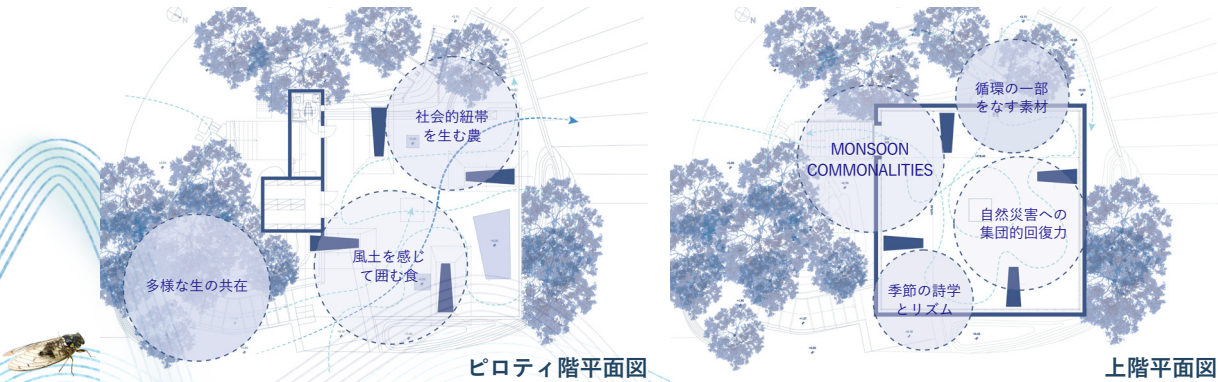
### 6. 多様な生の共存 Living together with diverse life

モンスーンアジアでは、高温多湿で季節変動の大きい気候のもと、人間と多様な動植物が関係しながら共存している。また、建築や集落は通風や降雨、周囲の植生や水系にตอบสนองすることで、動植物の生息環境と人間の活動領域が重なり合うこともしばしばである。互いを排除するのではない、あらゆる生命の共存の可能性がここにある。

# 展示計画

2027年 ヴェネチアビエンナーレ日本館では、モンスーンアジアにおいて風土に触れながら活動する3人の建築家を招き、地域に共通してみられるコモナリティの場を立ち上げる。

昔も今も変わらず、モンスーン地域におけるシェルターのための根源的な建築要素は、太陽や雨を防ぐための屋根であろう。さらに、湿度や降雨との距離を調整する床、そして水と関わる地面におけるアクティビティなど、水平に展開する建築要素には、モンスーンの微気候を読み取って生きる知性が凝縮している。こうした気候帯の文脈を踏まえ、それぞれの建築や場における微気候としての実践を生かし、3者が共同設計を行うことでモンスーンアジアの体験を創出する。



いづことしなく  
しいいとせみの啼きけり  
はや蟬頃となりしか…2

青空たかくたかく  
どこまでも、どこまでも  
舞ひあがつていつた蝶々…6

ほろほろと  
むかご落ちけり  
秋の雨…9

雨だ雨だおやもうやつてきた  
ぼつぼつと大粒でああいひさしふりて  
びつしより濡れる草木だ…6

あんまり晴れてる 秋の空  
赤い蜻蛉が 飛んでる  
淡い夕陽を 浴びながら  
僕は野原に 立つてある…10

見よや、太陽はかしこに  
わづかにおのれがためにこ  
深く、美しく木蔭をつくれ…4

青い、丈夫な、やわらかな、  
たのしいねどこよ、芝草よ…2

古池や  
蛙飛び込む  
水の音…5

ひかりがこぼれてくる  
秋のひかりは地におちてひろがる  
このひかりのなかで遊ぼう…7

影高く秋は黄の 桐の梢の琴の音に  
そのおとをひを聞ときは  
風のきたると知られけり…3

霞のまくをひきあげて 春のうた  
ことなかれはなきにはるかな  
こそ、春の台といふべけれ…11

雀がなくな、いい日和だな、  
うっとり、うっとり、ねむいな…

私が朝顔起こすときや、  
まだまだ「夏」は起きて来ぬ。  
すずしい、すずしい、そよ風だ…2

はつ夏の さむいひかげに田圃がある  
そのまわりに ちさいながれがある  
草が 水のそばにはえてる  
みんな いいかたがたばかりだ…7

暮れても明るい空のいろ、  
星がハモニカ吹いている…2

まさをなる  
空よりしだれ  
ざくらかな…3

## チーム“モンスーン・コモナリティ”

このチームは、キュレーター全体の監修のもと、モンスーンアジア地域で風土に触れて活動する建築家3名と、風土における建築の読み解き〈環境編集〉を行う1名によるチームである。

選出する出展作家は、活動拠点が異なる3名の建築家である。宜蘭に活動拠点を構えながら広域で活動し、地域に根付いて建築とランドスケープを橋渡しする黄聲遠 (Huan Sheng-Yuan)。上海を拠点に、都市部から漁村や農村など地方までの活動を通して、風土を活かした自治的な環境を構築する水雁飛 (Shui Yanfei)。チャウドックやホーチミンではメコンデルタにおける暮らしの知性を建築に顕現させ、現在は滋賀・琵琶湖の生態系とともに建築を思考する西澤俊理 (Shunri Nishizawa)。この3名に加え、東京と京都の二ヶ所を拠点とする菅健太郎 (Kentaro Suga) は、建築家の作品や思考を環境的な視点で読み解き、再編集を試みる〈環境編集〉の役割を担う。この多地域に広がる建築家との協働を通して、展示空間の設計を進めていく。

### 金野 千恵 Chie KONNO

建築家  
teco 代表



1981年神奈川県生まれ。2005年東京工業大学卒業、2005-06年スイス連邦工科大学 奨学生、2011年東京工業大学大学院博士課程修了 博士 (工学)。2011年 KONNO 設立のち2015年 teco 設立。2021-26年京都工芸繊維大学 特任教授。2024年スイス連邦工科大学 客員教員など。住宅や福祉施設、公共施設などの建築設計とともに地域リサーチ、まちづくり、アートインスタレーションまでを手がけ、仕組みや制度を横断する環境づくりを試みている。主な作品に『春日台センターセンター』(2023年日本建築学会賞 (作品) 他)、ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展 2016『en (縁):art of nexus』会場構成 (特別表彰)、『向陽ロジシアハウス』(平成24年東京建築士会住宅建築賞金賞 他)。主な著書に『ロジシア 世界の半屋外空間 暇も集いも愉しむ場』(2025, 学芸出版社)。



### キュレーター Curator

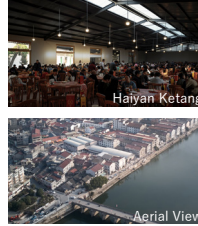
### 黄 聲 遠 Huang Sheng-Yuan

建築家  
田中央聯合建築師事務所 主宰



### 水 雁 飛 Shui Yanfei

建築家  
Yanfei Architects 主宰

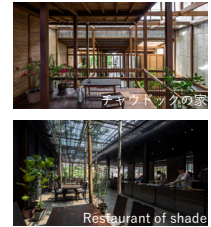


### 出展作家 Exhibitor

1963年台北市生まれ。東海大学卒業後、イェール大学大学院にて建築学修士号を取得。1993年に宜蘭に拠点を定め、田中央聯合建築師事務所を徐々に築き上げてきた。2015年、展覧会『Living in Place』を開催。2018年、ヴェネツィア・ビエンナーレ第16回国際建築展の台湾館において、『Living with Sky, Water and Mountain: Making Places in Yilan』を展示。2021年、第17回ヴェネツィア・ビエンナーレに招かれ、作品を展示。2026年には、『輕輕地走回地球表面』を出版。同書では土地、気候、身体感覚、そして日常生活へと立ち返る建築的思考を提示し、環境、人々、時間、さらには星空とのあいだに、謙虚で繊細な関係をいかに育むか問いかけている。

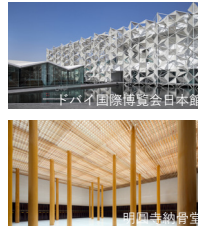
### 西澤 俊理 Shunri NISHIZAWA

建築家  
NISHIZAWA ARCHITECTS  
滋賀県立大学准教授



### 菅 健 太郎 Kentaro SUGA

建築家  
Arup  
京都工芸繊維大学特任准教授



### 出展作家 Exhibitor

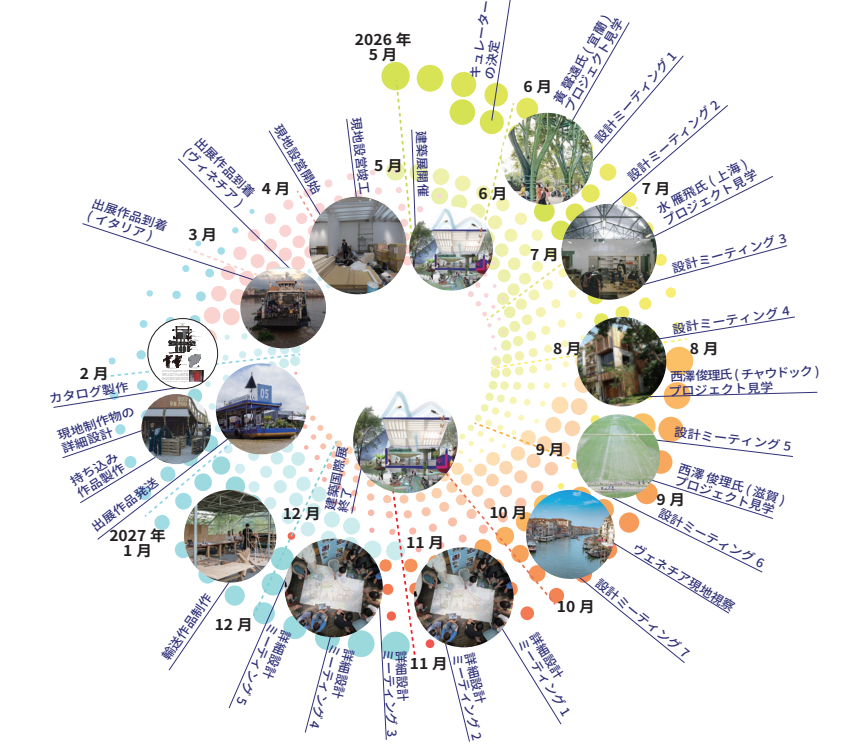
1980年千葉県生まれ。2003年東京大学工学部建築学科卒業、2005年同大学院修了。2005-09年安藤忠雄建築研究所勤務。2009-11年 Vo Trong Nghia architects パートナー、2011-15年 Sanuki+Nishizawa architects パートナーとして数々のプロジェクトに携わったのち、2015年ホーチミンにて NISHIZAWA ARCHITECTS 設立。都市部の富裕層だけでなく、メコン河流域の高床式住居の設計など、自然を受け入れて暮らす人々の住居空間を調査、設計。2023年より滋賀県立大学環境科学部准教授。研究室では一般的な建物だけでなく、人、魚、鳥、虫、植物、微生物、砂、粘土、光、水、風、・・・といった琵琶湖周辺の無数のアクターが生態学的に連帯する構造物の空間やコモナリティの仕組みについて研究。

### 環境編集 Climate Editor

1977年東京都生まれ。2001年早稲田大学理工学部建築学科卒業、2003年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了。久米設計を経て2009年 Arup 入社。現在はサステナビリティ・リーダーを務める。2021年より京都工芸繊維大学特任准教授を兼任。機械設備に過度に依存しないパッシブデザインや、従来の手法や価値観にとらわれない快適で心地よい空間のあり方を、研究と実践の両面から追求している。主な作品に、森鷗外記念館 (2014年 BCS賞)、明園寺納骨堂 (2016年 JIA 環境建築賞、2018年環境・設備デザイン賞優秀賞)、東京アクアティクスセンター、石巻市複合文化施設、ドバイ万博日本館、大阪万博クラゲ館など。

## スケジュール

キュレーター選出後、8月末までに展覧建築家の3名の作品を訪れ、大きな気候帯に共通する鍵を再確認し、モンスーン・コモナリティの思考を深める。同時に、月2回の全体ミーティングを開始し、展示案のプレストを進める。展示案の方向性を携えて9月にヴェネチアへ渡航し、現場確認、展示案を確定。10月-11月：詳細設計。12月：輸送作品の制作開始。2027年1月：輸送貨物の積荷、現地制作物の詳細設計、持ち込み作品の制作、カタログ検討。4月に現地設営開始。



## 予算

2016年にて会場構成を担当した経験から、会場施工費や輸送費、保険料といった金額の大きなものから早期に確認して準備を進めていく。また、出展作家の作品を互いに体験する視察を、スケジュールと予算に組み込み、視察のプロセスを進めていく。並行して、初期段階より、カタログ制作や資金獲得についても検討を進めていく。全体の円滑に進むように工程、予算組みを行う。

